

< 国際関係学部研究会報告 >

第1回(2001年7月3日)

宇宙環境の保護

龍澤 邦彦

今日、環境の保護は自明の理と見なされるが、宇宙環境の保護と言うと奇異に思われるかもしれない。しかし、宇宙活動は地球周辺空間の環境への配慮なしに50年以上に渡って行われてきており、その当然の帰結として宇宙空間の汚染は進んでいる。その中でも、近年特に問題となっているのは、管理不能となって浮遊する衛星、衛星放出時に爆破して外される留め金、分離されるロケットの段、機体の塗料の薄片、燃料の酸化排出物等のいわゆるスペースデブリ(宇宙残骸)である。これらは、毎秒7.9Km/secで軌道を周回しており、宇宙物体の航行や船外活動に危険を及ぼす。現在までにスペースシャトルの窓に窪みを生じさせ、また6mの残骸とソユーズとのニアミスが生じた。現在建設中の宇宙基地はバンパーをつけている。技術的な処理方法として、現在、利用終了と共に、航行に使用されない軌道に宇宙物体を押し上げる方法、シャトルによる回収、レーザーによる射撃を含む計画的落下がある。

このような技術面での検討が漸く国連宇宙空間平和利用委員会科学技術小委員会で終了し、現在法律小委員会での審議が始まろうとしている。法的には、スペースデブリの定義、通告義務を含む安全な処分の手続き、宇宙物体に対する権利(特に所有権)の調整、事故の際の国際責任と援助の問題などが検討対象となろう。いずれにしても、スペースデブリの問題は法的には空白状態なので可能な限り迅速な法制度整備が望まれる。

京都議定書をめぐる国際交渉の経緯と日本の課題

大島 堅一

2000年11月にオランダ・ハーグで気候変動枠組み条約第6回締約国会議(COP6)が開催された。COP6での論点は 京都メカニズム、吸収源の扱い、遵守手続き、途上国問題(資金援助・技術移転)であった。COP6では、特に についてアメリカ・日本などのアンブレラグループとEU・途上国の間で対立が激しく合意に至ることはできなかった。COP6での交渉決裂を受け、COP6再開会合が2001年7月にドイツ・ボンで開催されることになっている。

COP6とCOP6再開会合の間の2001年3月に、アメリカ・ブッシュ政権が京都議定書離脱の方針を明確にした。京都議定書の発効要件は、批准した附属書 国の1990年におけるCO₂排出総量が55%以上、かつ、批准する国が55ヶ国以上となることである。仮に、アメリカに加え、オーストラリアが批准しない場合、両国のCO₂排出量合計は附属書 国の38.2%に達する(アメリカ36.1%、オーストラリア2.1%)。8.5%分をしめる日本がアメリカに同調すれば、議定書の発効要件は満たされない。COP6再開会合における日本の役割と責任は、これまでの国際交渉史上、最も重くなるものと考えられる。

第2回(2001年10月16日)

2001年夏 沖縄

大空 博

2001年7月、私は沖縄を旅した。この地初の芥川賞作家・大城立裕の受賞作『カクテル・パーティー』(1967年)を読み込み、「基地に向かいあう沖縄のいま」を書けないか。それが旅の動機だった。大城は、アメリカ兵に娘を犯された父親の怒りを通して、米軍占領下の不条理を描いた。

安保条約と地位協定が「基地」と米兵問題の中核にある。この基本構図は今日も変わらない。

2001年6月に北谷（ちゃたん）町で起きた米兵による女性暴行事件で、小泉首相の消極的な地位協定見直し発言が住民の閉塞感を強めていた。

私はこの旅で、第二次世界大戦直後に沖縄北部山岳地帯で起きた米兵の暴行事件を知った。3人の米兵が住民の報復で殺され、55年後の2000年春、白骨体となって発見され米本国に返還された事件である。また、もう一人の芥川賞作家、目取真俊の連載「街物語 コザ」を読んだ。その中の一文「希望」（朝日新聞 99年6月26日付）は、3歳になる米兵の幼児を誘拐・殺害する男を描いた超短編小説とも言うべき作品だ。大城立裕は『カクテル・パーティー』で人々の目に宿る「淵のような深い暗さ」を描いていたが、これは目取真俊に通じるものだ。人々の心の奥底にある「怒りのマグマ」をあぶりだした二人の作家の視点に今日の沖縄が直面する問題が凝縮されていると私は思う。

アルザスにみる地域と国家

中本真生子

フランスとドイツの境界に位置するアルザス地方は、19世紀末から20世紀半ばにかけて、この二つの国家間で帰属が争われた地である。ドイツ語方言のひとつに数えられるアルザス語を日常語としつつ、ナポレオン軍において多くの将軍を輩出したこの地域には、「ドイツ的なもの」と「フランス的なもの」が混在しているといえよう。しかし19世紀末からの度重なる帰属変更と、二つの国家による国民化、同化政策の中で、アルザスは「アルザスの独自性（独自の文化、言語）」という主張を、そして自治権獲得運動を繰り返すこととなる。国語（ドイツ語、あるいはフランス語）が要求されるようになってはじめて「アルザス語」が意識され、「国民文化」が確立されてはじめて地方文化が自覚されたともいえよう。しかもその「アルザスの独自性」の内容は、ドイツ時代には

「アルザス語とフランス文化」を、そしてフランス時代には「ドイツ語とドイツ文化」をその根拠としており、「地域の独自性」の内容自体が、対抗する国家によって変化することが見てとれる。このようなアルザスの事例は、地域アイデンティティの、あるいはアイデンティティそのものの可変性を考える上で、大きな意味を持つであろう。

第3回（2001年11月20日）

中国の暴走・覇権大国化は有り得るか：非対称戦・新恐怖戦等を含む中国空軍筋の破天荒の想定・提言
『グローバルシミュレーション』を手掛りに

夏 剛

直近の米国中枢同時多発恐怖事件で顕われた、平民生活の中の文明利器の凶器化、非国家組織の非軍事的な戦争行動の危険性、非対称戦争に於ける先進国の脆弱を予見した中国空軍専属作家の喬良・王湘穂（俱に大佐）著『超限戦 兩個空軍大校対全球化時代戦争と戦法的想定』（解放軍文芸出版社、1999）を読み解く。湾岸戦争後の米国の新軍事理論に対する其の肯定と止揚から、21世紀の歴史の鍵と成る米中競合の図式を見出す。著者が唱えた貿易戦・金融戦・「新恐怖戦」・生態戦を含む「超限戦」（国境や戦場の境界線や固定観念・倫理の規制等、全ての枠組み・限界を超える戦争）を、兵家の原理や中国思想の所産と捉え、過激な外観の根底の強かな実用主義と精巧な均衡感覚を掘り下げる。

世界中に流行する「中国脅威論」を政治・軍事・経済・文化等の角度から分析し、戦争に繋がる危険要因と其を緩衝・解消する安全装置を挙げ（危険要素＝民族の美德なる勇敢精神や中共の伝統的な闘争心の行き過ぎの危険；儒教の道徳律と現実主義の相対的な地位。実用主義・功利主義・理想主義の危険；大国の栄光を取り戻す為

の富国強兵の強迫観念等に駆られる軍の独走の危険； 戦争の残酷さを知らぬ戦無派世代の少壮派の焦燥と「玩火遊戯」の危険； 「個人英雄主義」と功利主義の危険； 国家の意志を逸脱する個人の暴走や疎漏に因る偶発事故の危険； 民族意識・愛国主義と国民感情が超国家的な破壊行動を志向する危険； 途上国（地域）と先進国（地域）の経済格差に伴う戦争行動・軍備拡張の危険。他方、安全装置＝ 儒教の道德律の根強さと大国の矜持の故の国家暴走の危険の低さ； 軍の独走・暴走が不可能に近い統治体制； 「儒商・徳治」

を合い言葉とする鄧小平・江沢民時代の「慈化」； 中国人の現世至上主義と解放軍兵士の「小皇帝」化に因る厭戦心理； 伝統的な一国平和主義の「独善其身」の傾向； 中国の政治・軍事・外交の現実主義（綱引きと綱渡りの末に老大国の現実主義の伝統は暴走の衝動を吸収し得ると結論し、世界平和の為に中国の国益維持の許容範囲を把握するよう提言した。

本報告に基づく系列論文の序説は、『立命館言語文化研究』2002年第1号から数回に亘って連載する予定だ。